

戦前移住から見る南米日系社会の「日本人性」に継承に関する研究

ーパラグアイ共和国・ピラゴ移住地の事例よりー

1355057 佐々木美桜 指導教員 藤掛洋子

【背景・目的】現在日本で生活している日系人は、その9割がブラジル・ペルーなど戦前に移住が行われた国からやってきた人々であり、このような人々の中で日本語能力の低さが問題のひとつとして立ち現れている。南米日系社会において日本語教育とは、南米では見られないような日本人的精神、つまり「日本人性」を教育するという目的もあったことから、戦前から世代交代を経て4世以降が活躍する日系社会では既に「日本人性」が著しく失われていることが推察できる。一方戦後の移住がメインであるパラグアイ共和国では、筆者が2016年11月にピラゴ移住地で行った現地踏査の中で、3世世代が活躍する現代においても多分に日本語能力が継承されており、日本的な生活が残されていることがわかった。「移民言語は3世世代で現地語優位に移行する」という研究結果が存在していることから、パラグアイの今後の世代がどのような態度で「日本人性」を扱って行くかは非常に重要な問題である。そこで本稿では、ブラジルとパラグアイの「日本人性」への態度の変遷について比較した上でその保存・継承の条件について模索し、3世世代を超えてなお「日本人性」が継承される可能性やその課題について論じる。

【方法】先行研究の中で各地域の歴史の中から「日本人性」への態度について考察、比較したのちに、パラグアイ・ピラゴ移住地に暮らす2家族（1～3世）に対する半構造型インタビューを個別に行い、現在の日系社会においてどのような態度で「日本人性」が継承されているのか調査した。

【結果・考察】まず日系社会における「日本人性」の継承について、①各個人が自身の「日本人性」についてポジティブな感情を以って自覚すること、②教育者たる親世代の中に十分な「日本人性」が蓄積されていることが条件として存在しており、この点からピラゴの家族内における「日本人性」に対する態度を確認すると、まず①に関し来日経験に対する感想の中で世代間に顕著な差が見られた。1～2世世代が来日経験を通し、先代への尊敬や誇りといったポジティブな感情の中で日系人という事実への自覚を行っているのに対し、3世世代では日系人であることが「当たり前」という認識のもと、来日は「日本と移住地の違い」を確認した経験に過ぎなかった。また、これまで移住地学習などが行われていなかったことから、この差は根本的に「移住地を作り上げた先代達の苦勞や歴史を知っているか」という点から発生しているものであることが推察できた。また②の条件に関し、移住地内に働く場所が少ないことから若い世代の高学歴化及び都市集住化が進んでいることから、今後の世代の子育て環境において「日本人性」を十分に確保した環境の中で行うことが困難になってくるであろうことが課題として浮き彫りになった。

【結論】現在「日本人性」がよく守られているピラゴ移住地も、このままでは日本語を維持する面倒さや移住地暮らしの窮屈さから人口流出及び同化は避けられない現象として起こるであろう。上記で確認した「日本人性」継承の条件に対し、①日本との交流などによる移住地学習の充実化を通し、その後の来日経験の充実化を図る、②ほとんど1次産業のみで成り立っている日系社会の経済発展のために、高学歴化から1～2世世代よりも高度な専門的な知識を有している3世世代以降が貢献し2、3次産業を興して行く、などの解決策が求められる。